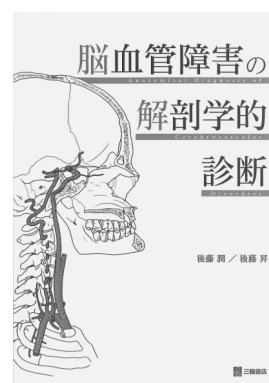


後藤 潤，後藤 昇：著

脳血管障害の解剖学的診断

評 者

木内 博之（山梨大学医学部脳神経外科）



臨床実習に来る学生の多くが、神経系は難しくよくわからないと口にする。講義をさぼったわけでもないのに、よくわかっていないというのが実感らしい。かく言う私も、学生時代、医師国家試験対策の分担で、神経担当になっていなければ、神経学は難しいだけで、推理小説を読み解くような明解さをはらんでいることに気づかなかったかもしれない。神経学の難解さは、幾重にも絡み合う神経線維の回路の複雑さによるところが大きい。一度、その解剖と機能との関係性が理解できると、数学の公式を解くように正解を出すことが可能となる。例えば、「タン」としか発語できなかった患者の剖検から発見された Broca 野（運動性言語野）が普遍的に人類に備わっているように、神経伝導路の障害により固有の神経脱落症状が生ずる。神経学において神経解剖が基本といわれるゆえである。

脳血管障害は、画像上見えにくい変性疾患などに比べれば、可視化しやすい病態である。しかし、脳塞栓症における出血性梗塞のように障害の程度や時間経過により劇的に変化することもある。このような中で、最適な治療を

行うためにも、基本となる病態の正確な把握が必須である。本書が他の教科書と決定的に異なる点は、正確無比な病理解剖所見を提示している点にある。単なる肉眼剖検所見ではなく whole brain の薄切切片による病変の詳細な描出にある。Kultschitzky 染色や著者らの独特な方法により染色を施された脳全体の薄切切片は髄鞘を芸術的ともいえる美しさで青く染め上げており、破壊病変の程度と周囲組織との関係、さらには遠隔部位との相互関係も手に取るように理解できる。加えて、図の所要所に日本語、英語、ラテン語で名前が付記されており、必要に応じてイラストでの説明もなされている。さすがは解剖学者の筆によるものと感服せざるを得ない。

本書は、最初に基本的な脳・脊髄の解剖について述べられ、次いで脳血管障害の病理学について解説されている。脳血管障害の統計、脳ヘルニア、脳梗塞、脳内出血、くも膜下出血その他の血管障害について詳細な解説がなされている。すべてに症例が提示され、肉眼所見と病理組織がカラー写真で掲載されており、大変わかりやすい。病理を理解した上で脳・脊髄血管

の解剖学へと続くので、正常解剖の臨床的意義が実感できる。血管の解剖についても、明解なカラー写真とイラストを駆使し、視覚的にも理解を助けている。特筆すべきは脳梗塞やくも膜下出血など動脈性疾患だけではなく、静脈ならびに静脈洞の解剖と病理にも多くのページを割いていることである。まさに血管系すべてにわたるバイブルと言っても過言ではない。また、統計的数値についても最近の文献が引用され、今日の日常臨床の指標として有用である。さらに、脳血管障害の医学史についての「余録」と神経解剖学や病理学の発展に寄与した医学者についての「抄伝」が掲載されており、神経学発展の歴史的経緯に興味をそそられる。

このように本書は脳血管障害を診療対象とする専門医師のみならず、脳血管障害を深く勉強されたい方々すべてにお薦めできる秀逸な書である。

A4 頁 420 2014 年
定価：本体 25,000 円＋税
[ISBN978-4-89590-497-1] 三輪書店刊